

山本麻子著「ことばを鍛えるイギリスの学校 - 国語教育で何ができるか」

岩波書店 2003年4月24日刊を読む

大学入学前の訓練と冒険 - ギャップイヤー制度とはどういうものか -

1. イギリスの子どもたちは初等・中等学校のころから、チャリティ活動やボランティア活動をたくさん経験する。そして、大人になる過程で少しずつ学校以外の実社会の姿を見ていく。教師や親や他の大人は、子どもがそうした経験をするのを常に奨励しているが、それは学校というのはきわめて限られた社会であるから、それ以外の社会を見る必要があると考えられているからだ。ただし、チャリティ活動でもボランティア活動でも、子どもが個別に、個人でこうしたことを行うのではなく、学校で担当の教師が率先して「足場を作って」やっつけていることが多い。
2. イギリスでは、A レベルなどの大学入学資格試験を受けたあと、正式に大学に入学する前の一年間を「ギャップイヤー」として過ごす者がいる。この間、アルバイトわしてそのお金で海外に行っであちこちを旅行して歩いたり、開発途上国でボランティアとして働いたりする。ギャップイヤーは制度として認められており、息子たちの学校では、ギャップフェアとという集まりを開催し、ギャップイヤーをとる者のために情報を提供したり、斡旋を助けたりする。最終学年の生徒たちは全員のフェアに参加した。
3. ギャップイヤーをとった場合、大学入学は卒業後一年たった翌年の10月になる。この制度はイギリスでは定着しており、大学願書に出願者がギャップイヤーをとるつもりかそうでないかを書く欄もある。受け入れる大学側はその年の学生定員の調整もあるので出願者の意向を確認しておく必要があるのだ。
4. 息子たちの中等学校の校長は、ギャップイヤーの存在を高く評価している。大学に入る前に世の中を少しでも広く見て職業体験をしたり、学校以外の人生体験をすることは、大学生活を有意義にし、また将来にとってもかけがえのないものなるであろう、と言う。私たちは自分たちが外国人でね先のこともわからななので、子どもたちにギャップイヤーをとらせることなど思いもよらなかった。別の外国人の友人は、せっかく学習の習慣がついているのにギャップイヤーなどしたら大学に入ってから勉強の習慣にもどるのに時間がかかる、時間の浪費だ。と言っていた。しかし、イギリス人の親は一般的にはこのようには考えないようだ。子どもたちの希望があり、ギャップイヤーをとらせることのできる状況にあれば、むしろ進んで応援する。また、子どもはそれぞれ違うのだから、同じ兄弟であっても兄はそのまま大学に進んだれども、弟はギャップイヤーをとったといったことも聞く。子どもの性格や大学で専攻するコースによって、1年ギャップイヤーをとることがその子

にとってプラスになるかマイナスになるか、親はよく考えるようだ。

P175 ~ 176

[コメント]

人生は長い。折角合格した大学に早く入学する必要は全くない。キャップイヤーの考えは、すぐ  
にても日本に取り入れ、学力と心と身体の万全の準備をして大学時代を迎えるべきと考える。

- 2010年4月20日 林明夫記 -